現代学生の規範意識と態度（3）

小杉　考司

Present students' attitude toward norms, politics and society（3）

KOSUGI E. Koji

(Received September 28, 2012)

1　問題

本稿では，小杉・渡辺（2011）で論じたGraham, Haidt and Nosek（2009）の尺度の再検討を目的とする。

Graham et al.（2009）では，道徳基盤理論（Moral Foundations Theory）を提唱している。そこで提案されている五つの基盤とは，人の安全に関するHarm/Care（危害），相互利他主義の進化過程に関するFairness/reciprocity（公平），集団に対する忠誠に関するIngroup/Outgroup（忠誠），階層的関係に関する態度であるAuthority/respect（権威），嫌悪感やそれに反対する態度であるPurity/sanctity（神聖さ）とされている。Haidtらが提唱している道徳基盤理論（Moral Foundations Theory, MFT）は，道徳を『価値観，慣例，制度，心理学的メカニズムの発展がセットになっていて，個人のわがままを抑圧したり規制したりするもの』と捉え，洋の東西にかかわらず上記五つの要素から成り立つ，としている。しかし，Graham et al.（2009）の尺度を日本語訳して用いた小杉ら（2011）では，因子分析の結果が必ずしも先行研究のそれとは一致しなかった。翻訳の問題や，サンプルサイズの小ささなど技術的に留意する点はあるものの，より本質的な問題として，道徳基盤理論が日本学生にそのまま適用できない，という可能性も依然残される。

Graham et al.（2009）の論文では，測定方法として複数の尺度や手法を提案している。一つはMoral relevance itemsと呼ばれる項目を用いるもので，人が何かについて正しいか，間違っているかという道徳的判断をするときに，五つの基盤がどの程度関与しているかを聞くものである。カテゴリは「全く関係していない」から「常に関係している」までの六段階であり，例えば危機に関する項目では「人に傷つけられたかどうか」を判断基準として関係する－関係しない，で回答する。

次に，Moral Judgement itemsを用いるものでは，各項目についてどの程度同意できるかを回答する。例えば同じく危機に関する項目では，「人間を殺すことが正しいはずがない」という項目に対して「全く同意できない」から「非常に同意できる」までの六段階で回答する。この形式が小杉ら（2011）で用いられたものである。

他にも，Graham et al.（2009）ではMoral trade off法として「いくらもらったらその行為をするか」と聞く評価法などが提案されている。本研究では，Moral relevance itemsを用い，5次元からなるという道徳基盤理論を検証することを目的とする。

2 方法

本稿では，先行研究（小杉，2012）で用いられたデータと，2012年４月に新たに取られたデータの二種類を統合して用いる。新たに取られたデータの特徴は次の通りである。まず調査対象者は，山口大学の大学生222名。年齢は18歳から31歳で，平均18.54（SD=1.24）。男性142名，女性79名。調査は共通教育の講義時間中を利用して行われた。実施日時は2012年4月11日と４月16日である。調査項目は，Graham et al.（2009）のMoral relevance itemsを筆者他一名の専門家が邦訳したものであり，「何かについて正しいか間違っているかを判断するときに，以下の基準についてどの程度考慮しますか」という教示のもと，22の項目について「かなり考慮する」から「全く考慮しない」までの五段階で回答を求めた。調査票には，多面的楽観性尺度12項目，就労動機尺度42項目，フェイスシートなどその他の項目が含まれたものを用いている。

3 結果

以下の分析には，M-plus ver 7.0を用いた。回答の中央値が４になる項目が多く，やや分布が歪んでいると考えられたため，順序尺度水準とみなして因子分析を行った。初期の固有値を図１に示す。図１からははっきりとした肘が見られず，因子数の判断がつきにくいが，固有値1.0以上になるのは６因子構造，また累積寄与率は４因子までで51.74%，５因子までで56.83%，６因子までで65.62%である。そこで４～６因子のそれぞれの解について，ベイズ法（収束基準はPSR＝1.1），GEOMIN回転で因子負荷量を算出したが，６因子構造は500,000回の反復を経ても収束基準に達しなかった。先行研究でも５因子構造が仮定されていることから，本研究でも５因子構造を採用し，負荷量を推定した。項目と回転後の因子負荷行列を表１に，因子間相関を２に示す。なお，表中各項目の前のアルファベットはそれぞれ，MFTにおけるIngroup, Authority, Fairness, Harm, Purityの項目であることを示す。

第一因子は「その人が嫌悪感を感じさせるようなことをしたかどうか（0.737）」「その人が感情的に傷つけられたかどうか（0.710）」「その人が弱くて傷つきやすい第三者を大切にしていたかどうか（0.631）」などから構成されている。主に，危害に関する項目から構成されているが，忠誠や公平さの項目も混在している。第二因子も「その人が不正な行為をしていたかどうか（0.878）」，「その人が暴力を使用したかどうか（0.449）」，「その人が礼儀や良識の基準を破ったかどうか（0.435）」など公平さ，危機，神聖さの項目が混在している。第三因子は「その行為があなたの関係者によってなされたものかどうか（0.742）」，「その権力が自身の仲間を守れていたかどうか（0.346）」などの項目からなり，忠誠と権威が混在している。第四因子は「その人が法的な権威に対して敬意を欠いていなかったかどうか（0.559）」，「その人が社会の伝統を尊重していたかどうか（0.543）」，「その人が道徳的に賞賛されるようなやり方で行動したかどうか（0.525）」，「その人が同じような地位の人たちであったかどうか（0.386）」と主に権威の項目で構成されている。第四因子は権威次元と命名してよいだろう。最後に，第五因子は「その人がその人自身よりもグループの利益を優先したかどうか（0.705）」，「その人が所属しているグループを裏切るようなことをしたかどうか（0.517）」と主に忠誠の項目で構成されており，忠誠次元と命名できる。

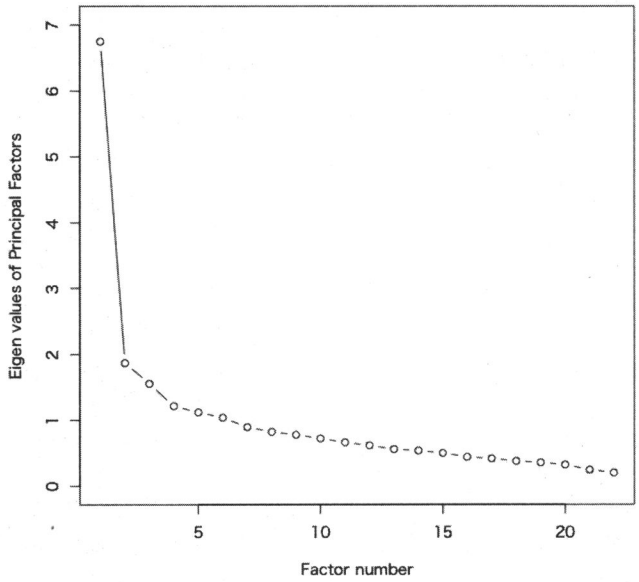

図１初期の固有値

4　考察

本稿では，Moral relevance itemsをもちいて道徳基盤理論が日本の大学生に当てはまるかどうかを検証したものである。探索的因子分析の結果，道徳基盤理論と同じ５次元構造で考えることが妥当であると思われるが，第一，第二，第三因子においては理論的配置とは異なる項目間構造が見られ，神聖さ，危機，忠誠，公平さが混在する結果となった。これは理論を支持しない結果ともとれるが，逆に日本の現代学生における特徴を反映しているとも考えられる。

第一因子は危害（Harm）の項目が多く含まれている。この次元は本来，身体的・物理的な危害に関することで善悪判断をするというものであるが，ここに「嫌悪感」や「感情的に傷つけられた」という用語が含まれる項目が入ってくることから，心理的・主観的な危害を重く評価する日本的文化が反映されているとも言えるだろう。日本人は「こころ」や「気持ち」を重視する傾向が強く，こうした傾向を山岸（2002）は「心でっかち」と呼んでいる。小杉（2012）も指摘するように，こうした心理偏重主義は原因帰属の誤りのひとつである。そして日本的な文化はそうした認知的バイアスを育てるような宗教的，思想的背景を持っている。井沢(1995)は日本の宗教的背景として，聖徳太子の制定したとされる十七条憲法にあるような，「和を持って尊しとなす」とする精神と，御霊信仰，言霊信仰を挙げる。集団における和，すなわち全員の納得を目標とするような意思決定ルールは，時に非論理的であったり不合理的であったりするが，日本人は効率性よりも集団成員全員の心理的安定を重視する方針を取っている。他者の気持ちを慮る美点が，ともすれば行き過ぎた「心でっかち」な状態を作り出す。道徳的判断においても，集団成員全員の心理的側面を評価しようとする側面が影響していると考えられる。

表1 因子負荷量（* significant at 5% level）

item	F1	F2	F3	F4	F5
(I) その行為があなたの所属集団に影響を及ぼすものであったかどうか	0.483*	0.036	-0.001	-0.231*	0.294*
(A) その人が自身の役割と義務をまっとうしたかどうか	0.357*	0.074	-0.043	-0.025	0.127
(F) その人が他の人たちよりも得をしてしまっていないかどうか	0.303*	0.062	-0.034	0.004	0.198*
(F) その人たちの人権が無視されていないかどうか	0.543*	0.098	-0.194	0.076	-0.026
(H) その人が弱くて傷つきやすい第三者を大切にしていたかどうか	0.631*	0.033	-0.044	0.069	0.051
(H) その人が暴力を使用したかどうか	0.367*	0.449*	0.034	0.019	-0.019
(F) その人が不正な行為をしていたかどうか	0.003	0.878*	-0.001	0.004	0.096
(I) その行為があなたの関係者によってなされたものであったかどうか	0.015	0.154	0.742*	0.005	0.065
(P) その人が礼儀や良識の基準をやぶったかどうか	0.138	0.435*	0.185	0.072	-0.060
(A) その権力が自身の仲間を守れていたかどうか	0.320*	-0.013	0.346*	0.078	0.039
(H) その人が感情的に傷つけられたかどうか	0.710*	-0.108	0.103	0.031	0.045
(A) その人が社会の伝統を尊重していたかどうか	0.116	-0.002	0.013	0.543*	0.046
(H) その人が危害を加えられたかどうか	0.629*	0.173	0.117	-0.144	-0.051
(P) その人が異常で品位を貶めるようなことをしたかどうか	0.538*	0.027	-0.019	0.239*	-0.024
(P) その人が道徳的で称賛されるようなやり方で行動したかどうか	0.081	0.209*	-0.043	0.525*	0.100
(I) その人が誠意を示していたかどうか	0.348*	0.157	-0.005	0.286*	-0.113
(A) その人が法的な権威に対して敬意を欠いてなかったかどうか	0.005	0.183	0.132	0.559*	-0.020
(I) その人がその人自身よりもグループの利益を優先したかどうか	-0.006	-0.004	-0.003	0.345	0.705*
(A) その人々が同じような地位の人たちであったかどうか	-0.042	-0.108	0.190	0.386*	0.386*
(P) その人が嫌悪感を感じさせるようなことをしたかどうか	0.737*	-0.183	0.005	-0.010	0.001
(F) その人たちが他の人たちと異なる扱われ方をしていなかったかどうか	0.497*	0.059	0.020	0.009	0.360*
(I) その人が所属しているグループを裏切るようなことをしたかどうか	0.286*	0.022	0.157	-0.011	0.517*

第二因子は不正，暴力，良識の基準に関する項目であり，公平さと危害と神聖さが混在しているようである。しかし，これもまた日本の文化的背景をもとに読み解くことが出来るだろう。すなわち，日本人にとって暴力は穢れと考えられるため，忌み嫌われるという文化的背景の存在である。古くは鎌倉時代に軍事を担当する武家が政治権力を握った時も，それまでの政権担当であった皇族や公家が基本的に武力を穢れたものとして嫌ったことが原因とされる（井沢,1996)。現代日本においても，自衛隊の位置づけは非論理的であることは間違いなく，その存在が合憲なのか違憲なのかは人によって賛否両論である。これは日本人が，軍隊すなわち暴力を穢れたものだと判断し，合理的に判断するというより道徳的に判断してしまうことがひとつの要因であろう。このように，日本においては危害に関する判断がどうしても神聖さと独立には生じないと考えられる。もちろん，不正は「汚い」と言われるように，穢れの判断と親和的である。

表2　因子間相関係数

	F1	F2	F3	F4	F5
F1	1.000				
F2	0.539	1.000			
F3	0.278	0.145	1.000		
F4	0.300	0.208	0.156	1.000	
F5	0.203	0.069	0.237	0.122	1.000

第三因子は忠誠と権威の混在である。そこにまた，「その人が礼儀や良識の基準を破ったかどうか」という神聖さ項目も含まれている。これは日本における権威，すなわち全体的決定権を有するものが「和を持って尊しとなす」精神にみられる「集団性」であることで理解できるだろう。山本（1983）が問題として取り上げた「空気」はまさに日本人にとってもっとも尊重すべき集団全体の和であり，そこから意思決定，すなわち権威が生じることになる。また，MFTでは礼儀・良識の基準と考えられた神聖さも，集団の和に関わる礼儀・良識であり，権威と忠誠(集団)が混在する因子に深く関与すると考えられる。日本人的な和の精神，穢れの思想は，道徳的価値判断に大きく関与していると考えられる。MFTの用意する項目は，理論と少し異なった形で構成されて表出されるが，通文化的に五つの道徳的基盤があるとする仮説そのものは，判断を保留するべきである。日本文化的な道徳判断基準だけを反映した項目を作成し，MFTの項目と弁別可能なまとまりをするかどうかといった方法で，今後検証していく必要があるだろう。

5　引用文献

Graham, J., Haidt,J., and Nosek, B. A. (2009). Liberals and conservatives rely on different sets of moral foundations. *Journal of Personality and Social Psychology*, **96**, 1029-1046.

井沢元彦（1995). 逆説の日本史3；古代言霊編, 小学館.

井沢元彦（1996). 逆説の日本史4；中世鳴動編, 小学館.

小杉考司（2012). 現大学生の規範意識と態度（2），山口大学教育学部研究論叢第三部, 61,113-122.

小杉考司（2012). 社会心理学における帰属概念について研究指導をとおして理解する　福田廣・名島潤慈（監修）田邊敏明（編）心理学へのいざない　北大路書房.

小杉考司・渡辺成（2011). 現代学生の規範意識と態度（1），山口大学教育学部研究論叢第三部, 60, 49-60.

山岸俊男（2002). 心でっかちな日本人,日本経済新聞社.

山本七平（1983).「空気」の研究，文藝春秋.